

人とまちを結ぶ情報紙
広報おおたけ

NEWS LETTER OATAKE

2002
12
No.1023

ともしび
TOMOSHIBI
和太鼓

12月9日は「障害者の日」。そして12月3日から9日までは「障害者週間」となっている。国連で「障害者の権利宣言」が採択された12月9日を「障害者の日」とすると、昭和56年の国際障害者年に宣言された。これは障害者問題について国民の理解と認識を一層深め、障害者の福祉の増進を図る目的で設けられたものである。さらにこの日は平成5年12月3日に公布された障害者基本法に「障害者の日」と明記された。

燃える、生命の鼓動。

秋空に太鼓の音が高らかに鳴り響いた。知的障害者、身体障害者とその家族でつくる「ともしび太鼓」の演奏だ。明るく前向きに、地域の人々とともに活動してきた「ともしび太鼓」の15年の姿を紹介しながら障害者福祉を考えてみた。

(2～7ページ)

ともしび太鼓の編成
重近(締め太鼓)、中胴、
立ち太鼓、竹、チャンチキ
(鐘)で編成されている。
曲目によって楽器を交替
する。知的障害者・身体
障害者10人とその家族
7人がメンバー。

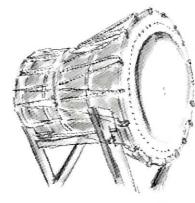
●ともしび太鼓使用楽器



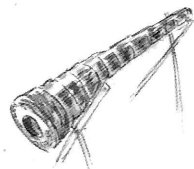
明るく軽やか、やわやわと鋭い音色。
重近(おそもん)と呼ばれる締め太鼓。



腰を落としてたたき姿がかっこいい。
中胴は革のある太鼓。



力強く打つ音が曲の土台を支える。
立ち太鼓を打つ姿は勇ましい。



亀居城で採れた
竹が奏する音は、
大竹の音々もの。



チャンチキのリズムは、
陽気に響く。

腰を低くかまへ、
指揮棒が振り下ろされるのを
「じゅっ」と待つ。



ともしび太鼓は、昭和62年10月に、
広島県知的障害者福祉大会が大竹市
で開催されたとき、アトラクション
として太鼓に取り組むことになり産
声をあげた。当初は、大会までの予
定だったが、演奏の喝さいが後押し
となり、15年の道のりを歩んできた。
さらに途中からは、練習に送り迎え
をしていた母親たちも加わり、障害

「テケツクテンテンヤー」「チャカチ
ヤカチャンヤン」「ドンドンヤド
ンヤ、カララドンドンヤ」「ド
ンツンドンツン」。身振り手振り太
鼓の各パートの擬音を交えて指導す
るのは、山田巖さん(黒川3)だ。
11月10日のコイ・こいフェスティバル
出演に向けてメンバーのまなざしも
真剣そのものだ。譜面台を前に、17
人の息がそろおうように指揮棒を振る
山田さんの目もするどく光っている。
自らも亀居城太鼓のグループに属し、
ばちを握る山田さん。第1・第4木
曜日の夜は、ともしび太鼓の指導に
あたっている。

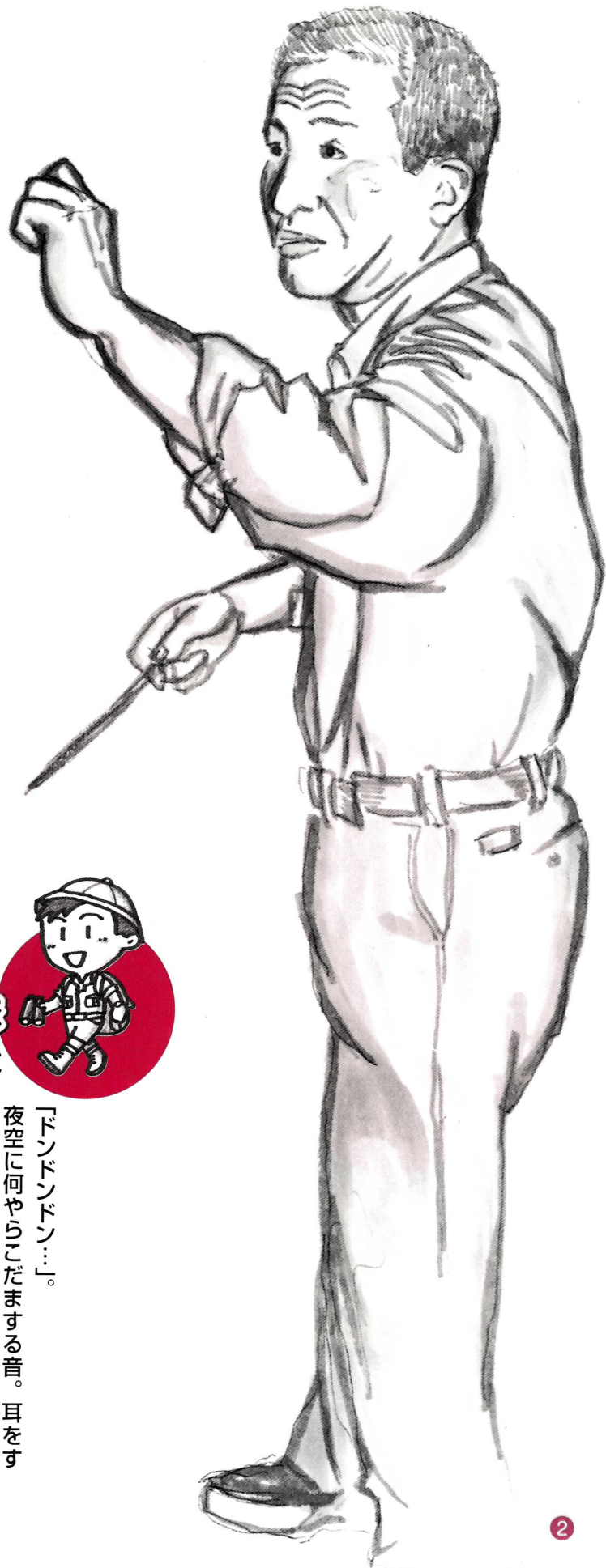
者と保護者という、めずらしい親子
の太鼓グループへと発展していった。
「気合いの声小さい!」「世界中
で一番きれいな音を出して」。
山田さんの声にも一段と熱がこもっ
てくる。今回取り組んでいる曲は、
「決意」。平成9年に10周年を迎えた
きに、太鼓の師匠になる天野流宗家の
天野宣さんが贈ってくれたものだ。
複雑なリズムのパターンを各パー
トでくり返しくり返し打ってみる。
今までも演奏したことのある曲だ
が、何度やってみてもそろわない。
ワンテンポ遅れる。山田さんたち亀
居城太鼓のメンバーが根気よく一
緒に打ってみせる。自分以外のパー
トが練習しているときも、必死に耳
を傾けている。
「じょうずな演奏よりチームワー

クで一生懸命やるのが大切です。
1曲できるまで時間をかけてじつじ
りやっています。そして親子で取
り組むことで、家に帰って共通の話
題にもなると思います」と山田さん
は語る。
親子のきずな、メンバー同士の連帯
感、共通の目標に向かう姿を感じるこ
とができた練習のひとつだった。

燃えろ、生命の鼓動。

ともしび太鼓15年の歩みの謎

ユーモアあふれる山田さんの
指導に、次第にみんなもなつてくる。
和気あいあいとした雰囲気の中、
「こぞ!」という時には、山田さんの目は
キラリと光る。



「ドンドン...」。
夜空に何やらこだまする音。耳をす
ますと、その音は小方中学校の校舎
から聞こえてくるようだ。太鼓らし
き音の発信源を訪ねると、あかりの
とまった教室がある。その中で一心
に太鼓に向かう人の姿が見えた。
ともしび太鼓。15年前に、大竹市心
身障害児者・手をつなぐ親の会(現大
竹市手をつなぐ育成会)のメンバーが
中心となり発足したグループだ。
以来、年に数回、イベントなどで演
奏を行い、多くの聴衆に感動を与え、
多くの人と手を取りあいながら活動
を続けてきた。
探検隊は、太鼓を通して地域の人々
にメッセージを発信する、ともしび
太鼓の姿を探るべく、練習の場に足
を踏み入れた。

ちょっとひと言

練習はちよっときびしいけど、楽しい。仕事もちよっときびしいときもある。貞村耕一さん(白石2)



平成6年に市立図書館であった「星野富弘詩画展」のオープニングでの演奏を聴いて、感動したことがきっかけで息子と一緒に加入しました。息子が中2のときで、今は21歳になりました。普段は大野寮に通っていますが、月に何回かみんなと会えるのを楽しみにしています。演奏はつたないですが、息子も音を通してみんなとのつながりを体で感じていると思います。太鼓以外にも関わりが持てるようになってよかったと思います。

今田弘子さん・皓二さん(本町2)



ひとつの曲が演奏できるようになったときの喜びは、大きいものがあります。太鼓も仕事も人が1日のできることが1カ月かかったりします。でもできたときには、自分の世界が広がっていると思います。私も息子と同じ職場で働いていますが、周りの皆さんも職場でしかってくれたり、励ましてくれたり、と理解と協力があつてのことと感謝しています。

藤原一子さん(御園1)
(藤原さんの母親)

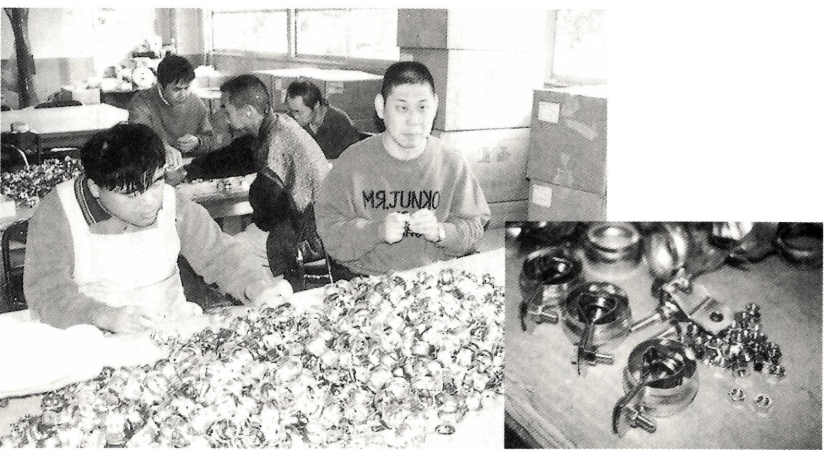
こういった障害者の雇用安定のための制度も設けられている。職場適応訓練の実施や雇用した場合、事業主に対して奨励金の支給も行われる。また、法律でも従業員数に対する障害者の雇用割合を定めている。

「実際、雇うということは、根気も必要です。わが子を見守るように愛情を持つことが大切です。私自身も、ともしび太鼓に関わることで、障害者と接するようになりました。そこで初めて障害を持った人々が、自分たちの周囲に多くいることを知りました。仕事も太鼓も、少しずつですが、進歩していきます。彼らは能力を持った人間であり、そこに人間の可能性というのを感じています。」

仕事や太鼓で社会参加し、地域と関わることで生きる力も培われていくのだと思います。そう中川さんは言葉を結んだ。

太鼓のメンバー新出俊彦さん(36歳)と杉尾秀樹さん(35歳)は、港町1丁目にある大竹さつき作業所に通っている。社会福祉協議会が設置している心身障害者就労促進事業所というところだ。障害者が通所しながら、作業訓練などを通して社会参加を図っているもの。現在19人(知的障害者7・身体障害者4・精神障害者1・重複障害者7)が通っている。主に配管金具部品の組み立てや樹脂製品の加工を企業から受けている。作業台の上に積まれた配管金具をてきぱきと組み立てていく。探検隊もやってみたが、不器用な手つきでもたもたしているうちに、新出さん

ノーマライゼーション
1950年にデンマークで知的障害者の親の会が主張した考え方。障害のある人もない人も、高齢者も若者も、すべて人間として普通(ノーマル)の生活を送るため、ともに暮らし、ともに生きていくような社会こそノーマルであるという考え方。障害のある人が、一般社会の中で普通の生活を送れるような条件を整えるべきであるとされている。



山積みされた配管部品をつぎつぎと組み立てていく。新出さん(左)と杉尾さん(右)

の方は素早くボルト、ナットを取り付けていく。(ちよっとあせてしまいう探検隊)杉尾さんは、仕上げに工具でボルトをしっかり締め、箱に詰めていく。これらの加工賃は、作業にあつた日数などにより、収益の範囲で支払われている。

現在作業所はより良い環境づくりを目指し、社会福祉法人として独立するための運動を行っている。

てきぱき作業に探検隊もあせる。



製めん工場で、うどんづくりの工程を受け持つ、藤原さん(手前)と貞村さん(奥)。

働くとももしびびたち

人間の可能性を感じる。

ともしび太鼓のメンバーたちは、日ごろそれぞれの仕事に就いている。市内の事業所や大竹さつき作業所、知的障害者授産施設の県立大野寮などに通う。

その中の二人が勤める、晴海の埋め立て地に新しくできた企業団地の一角にある製めん工場を訪ねた。

この日、藤原弘さん(30歳)と貞村耕一さん(23歳)は、うどんの生地から冷凍されるまでの流れ作業を受け持っていた。もうもうとうどんをゆであげる湯気のたつ部署で、じつとめんを見つめ、ころあいを見計らって次の工程に送っていく。

彼らを雇用している中川忠さんは、亀居城太鼓のリーダーでもあり、ともしび太鼓の指導者でもある。

中川さんの会社で、障害を持った人を雇用し始めたのは12年前、やはり太鼓が取り持つ縁だった。

当時藤原さんは、廿日市養護学校に通いながらともしび太鼓に参加していた。高3のときに、就職活動をしていたのを知った中川さんが彼を受け入れた。

最初はケースを洗ったり、ダンボールを作ったりする作業から始めた。しかし慣れない作業のため、拒否反



太鼓の指導者であり、勤務先の社長でもある中川さん(左)。愛情を持って、時には厳しく、時には優しく接する。

一つひとつは 小さなあかりでも 育てていくことで広がり そしてまわりを照らしていける

新出尋幸さん 思い出を語る

ともしび太鼓は、昭和62年の10月に県の知的障害者福祉大会が大竹で開催されることになり、当時の大竹市中心身障害児者・手をつなぐ親の会が、そのアトラクションにと考えたことで誕生した。

「障害者自身が何かやるのがよからうと、その年の5月から練習を始



ともしび太鼓には、5曲のレパートリーがある。デビュー曲「ともしび」（昭和62年）、弥栄ダムをイメージした「やまびこ」（昭和63年）、海と島の博覧会で演奏した「さざなみ」（平成元年）、太鼓の師匠、天野宣さんがプレゼントしてくれた「えくぼ」（平成2年）同じく天野さんが結成10周年記念に作曲してくれた「決意」（平成9年）。

海と島の博覧会の大竹の日で演奏披露。（広島市 平成3年）

めました。しかし最初は、ばちを持つのもやっと、音はそろわず、どうなることかと思った」と、発足時から長く世話人を務めていた新出尋幸さん（立戸上）は当時を振り返る。

しかし5カ月の猛練習が実り、福祉大会では、素晴らしい演奏を披露し、訪れた人々に絶賛されたという。せっかく、ここまでやってきたものを絶やすのは惜しいということで、引き続き活動していくことになった。

亀居城太鼓のメンバーの熱心な指導を受け、その後も市内の「市民まつり（現コイ・こいフェスティバル）」「桜まつり（現亀居城まつり）」「健康福祉まつり」などには、必ず出演している。ほかにも「海と島の博覧会」や「24時間テレビ 愛は地球を救う」を始め、さまざまなイベントやテレビ出演を重ね、自分たちの存在をアピールしてきた。

数々の演奏活動の中でも、メンバー



当時を思い出す新出さん。



あこがれの星野富弘さん（中央車いす）を囲んで。（群馬県東村 平成8年）

星野富弘（ほしの・とみひろ）
1946年群馬県東村に生まれる。
中学校の教師在職中の事故で手足の自由を失う。入院中に口で筆を持ち詩や絵を書き始め、創作活動を始め。1991年東村立富弘美術館開館。



今年からリニューアルした「亀居城まつり」にも登場。（4月7日）

NHKの「じゃけえ広島」にスペイン通りから生出演。（1月28日）

今年もいろいろと活躍



礼に始まり礼に終わる。「ふれあい健康・福祉まつり」で。（10月6日）

聴いてほしい！ボクらの音を。 見てほしい、ふんばって立つこの姿を。

草岡康子さん
「今日はあがった。ちょっと失敗もした。いつもならあがらんのじゃけど。」と演奏を終えてひと言。



リーダーの二階堂聡久さんにインタビューする五反田さん。

冬がひと足先にやってきたような今年の秋。昨日までの寒さがうそのような小春日和の11月10日、「コイ・こいフェスティバル・イン・おたけ」が総合市民会館で催された。今年もステージのオープニングをともしび太鼓が飾る。

ステージの上には、亀居城太鼓のメンバーらによって運ばれた大小の太鼓などがセッティングされている。集まってきたともしび太鼓のメンバーがあいさつを交わす。リーダーの二階堂聡久さん（38歳 元町上）がウォーミングアップをして体をほぐし始める。出番が近づくと、緊張が高まる。上着を脱ぐと、そろいの真っ赤なトレーナーの背中に書かれた「ともしび 和太鼓」の白い文字

一人ひとりが主役

五反田 曜子さん（リーダー）

初めて演奏を拝見したのですが、指揮者にあわせ、皆さんが一つになって演奏をくり広げるのが印象的でした。ソロパートで、無の心境で打っている姿には胸が熱くなりました。まさに、一人ひとりが主役なんだと感じました。

いろいろなイベントに行くたびに、ともしび太鼓と出会っていた探検隊。ただどなかなか、話をすることができなかった。しかし彼らが見せる誇りげな姿。その姿を少しでも伝えることができないかと思った。そして日ごろはどんな生活を送っているのかも知りたかった。とりわけ就学、就職において厳しいものがある。ノーマライゼーションと言われるが、何をもちえてそう言えるのか探検隊にも分からない。12月9日は「障害者の日」。だが、そのことを知る人は少ない。彼らのともす小さなあかり。それは、われわれの心の中の何を照らし出してくれるのだろうか。

「もつともつとどん欲にならないといけない。鼓に閉じこもらず積極的にいるんなところに出て行き、力を試して欲しい。そしてともしび太鼓の情報発信していかないといけない。夢は海外で公演することです。海外にも障害を持った人が活動しています。そういう人たちとも交流していきたい」。15年を一つの区切りに、新出さんはそんな希望を語ってくれた。

が朝日に映える。さあいよいよ登場だ。ステージに上がり、自分のポジションに着く。司会の五反田曜子さんが紹介を始めます。「障害というハンディを背負っています。精一杯生きています」といふと、精一杯生きています。山田さんの指揮棒に視線が集まる。一瞬息が止まるような空気が支配する。秋晴れの空に勇壮な生命の鼓動がこだまします。

「決意」「ともしび」の2曲の演奏が終わる。

15年の歳月、障害者とその親、弟たちで結成したともしび太鼓は歩み、彼らを囲む人々の温かいまなざしによって育まれてきた。そしてこれからの時代、彼らはまた新たな一歩を踏み出して行くことをひしひしと感じる探検隊であった。